

「学業成績」に対する女子大学生の認識についての探索的研究

友納 艶花・古城 和子

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

要 旨

中学校・高校では学業成績が進学や進路選択に重要な意味を持つことから多くの研究が進められている。しかし、大学生を対象にした研究は少なく、学業成績について学生自身がどのように認識しているのかを直接取り扱う研究はなされてこなかった。近年は女子の大学への進学率が上昇傾向にあり、社会での活躍への期待が高まっていることから、本研究では女子大学生の学業成績に対する認識について調べることを目的とした。KJ法により分析整理を行った結果、14の中カテゴリと41の小カテゴリが得られた。このことより、多くの女子大学生は、学業成績について「内的・変動的」であり、「努力」「学びの量質」などに関係しているとの認識が考察された。さらに、「授業外週間学習時間数」が1～2時間内が半数以上を占めている結果より、「授業外時間」での学び方、効果的な過ごし方、キャリア教育との連携教育の工夫が必要であることが示された。

1. 問題と目的

学業成績は中学校から高校への進学過程の中でかなり大きな役割を演じている。そして、「公的な学力」の証明は通常学級の学習成績によって行われていること（江原・杉沢、1980）から、中学生・高校生にとってテストは重要で成績には特別な関心を払うことになる（前田、1996）。特に、中学生では高校進学時の内申書の基礎資料になり、高校生にとっては、高得点をとることが将来の進路選択に重要な意味を持つからである。また、定期テストの結果は教授を行う側にとっても成績を見直して学習改善を行うことが望まれることから有益な資料である。

小学校から高校までの学業成績に関する研究については、様々な視点から研究が行われている。林（1990）は、小学生を対象に、体育の学習成績に対する原因帰属の因子構造について検討を行い、「努力・工夫」「有能感」「運動能力」「学習態度」「教授行動」「生真面目さ」「体調」「体力」「友人」「グループ成長」「学習環境」「競争欲求」「課題特性」と13個の因子を抽出し、これらの因子が学習成績と関連する要因であることを明らかにした。また、豊田（2010）は、小学生から中学生を対象に個々の学習活動が学業成績に及ぼす影響を検討し、宿題や理解への意欲及び塾における学習が学業成績に実質的な影響を持っていることを示唆した。「わからないところは、分かるまで勉強します。」という理解への意欲が学業成績に寄与している

という事実は、この意欲が知的好奇心による内発的動機づけ、または、向上心による達成動機づけのいずれの要因によって喚起されているのかを明らかにすることは残された。一方で、宿題をするという行動が学業成績を規定する重要な要因であることを明らかにしている。宿題は、現職教員にとって日常的な事象であり、宿題のあり方を再考する時期にきていることが指摘されている。

また、大西・志林(2013)は、大学進学を目指している高等学校の英語学習者を対象に研究を行った。主に、質問紙調査を通して高校生の外発的動機づけ、自己効力感と学習成績の自己評価との関連について検討を行った。その結果、自律的な学習者を育成するため、教師が学習者の外発的動機づけの特徴を認識し、学習者をより自律性の高い調整スタイルへと促していくことが必要であることが示された。さらに、学業成績は児童・生徒の行動の一特性形態とみることができることから、学業成績を規定する要因として、素質(知能)、意志、気質、性格、教師の指導性、親の教育態度、出生順位など(塩見・渡辺、1999)を取り上げて検討を行っている。中塚(1970)は、高校生の学習観の規定要因として知的能力と性格を取り上げて検討を行った。学業成績とY-G性格検査の各測度間に相関が認められなかったが、知能検査及び内田クレベリン検査結果とでは正の相関がみられたとしている。同様、松田ら(2006)の研究でも、試験成績と性格との関連性については、中間、期末試験ともにBig Five5因子性格検査との相関は認められず、試験成績と性格との関連性は示されなかったとしている。

このように、児童・生徒を対象として学業成績と関連する要因に着目して多種多様な側面から検討が行われているが、大学生を対象とした研究はこれらと異なった視点からの検討が多かった。例えば、中村・松田(2015)は、大学での出席率とGPAを用いて大学への帰属意識と大学不適応に及ぼす影響を検討し、大学不適応感は出席率及びGPAに負の影響を与えていることが示された。怠学や成績不良、牽いては留年を予測する有効な指標であるかが示唆された。大野木・杉村(1992)の研究では、特定の理論に依拠せず、成績が悪かった場合の理由づけについて自由記述298項目を質問紙59項目にまとめて大学生に実施し、結果として「教師の指導法・テストの出題採点」「自分の勉強法の努力」「自分のテスト中の回答方略」「テスト中の心身のコンディション」「自分のやる気」の5因子を識別している。

さらに、北條(2010)は、大学在学中の学習成績・学習への取組と卒業後の所得について実証的に分析を行った。その結果、専門科目の成績が優秀な卒業生はそうでなかった卒業生に比べ、所得が13.7%高く、卒業研究の制作・執筆にとっても熱心に取り組んだ卒業生はそうでない卒業生に比べ23.3%高かった。また、在学中にプレゼンテーション能力を獲得したと推定される卒業生はそうでない卒業生に比べ13%高い所得を得ている結果を提示している。つまり、在学中の学習成績が調査時点の所得に影響を及ぼすであるが、大学教育は全人格的育成を志向するものであり、所得稼得能力はその一部であると結論と課題が示され

ているものの、経済社会学視点での研究結果は興味深いものであり、大学での学習成績について様々な視点での検討が必要であると思われる。

近年、大衆化した大学における学生の学力の低下、及び学生の「生徒化」問題に関する指摘などがある。東洋経済オンラインの辻 太一郎が2013年11月8日に書いた記事によると、これまで就職活動ではほとんど見向きもされなかった大学での成績が就職活動のエントリー時に成績表として提出を求められ、エントリーシートに並ぶ重要資料として活用を始める大企業が現れるとしている。企業が大学の成績を参考にするという大変化が、今、なぜ起きようとしているのか3つの理由があると指摘している。①企業の社会的責任が問われ始めた ②大学の成績の利用が簡単になった ③成績は、大学生の「やらなければならないことへの取り組み方」を見る最高の材料になるとのことであった。

一方、高等教育研究機関のミッションは「授業者の授業力向上」のための研究から「学習者の学習力向上」のための研究へと焦点が移り変わることには、学生が「授業時間+授業時間外の学修」に勤しむという前提抜きにして、教員が授業技術だけを向上させても限界がある(山内、2013)ことが指摘されている。江原・杉沢(1980)は、戦後日本の学力論の展開は、学力の主體的側面(学習主体の主體的・内面的条件)を基軸にした系列から、その客體的側面(教育内容)を基軸にした系列へ、さらには両者の統一へと進展し、現代の学力論はまさに地平において学力の内実形成を追及する課題に直面していると指摘している。ところが、教育心理学の研究領域において、学習者主体である大学生が学業成績についてどのように捉えているのかを直接扱った研究はあまりない。

また、内閣府男女共同参画局により発表された「教育・研究における男女共同参画の資料」によると、平成25年度の学校種類別の男女の進学率を見ると、高等学校等への進学率は、女子96.9%、男子96.2%と、女子の方が若干高くなっている。女子は全体の9.5%が短期大学へ進学しており、この短期大学への進学率を合わせると、女子の大学等進学率は55.2%となる。近年、大学などへの女子の進学率が上昇傾向にあることが示されている。一方、日本では他の先進国に比較して女性の社会参画が進んでいない。しかしながら、それは、裏返すと、女性の参画が進み、女性の活躍する場面が多くなればなるほど、その潜在的な力が発揮される可能性が大きいことを意味している。

そこで、本研究では、進学率が上昇傾向にあり、社会での活躍への期待が高まっている女子大学生に対する質問紙調査の自由記述における回答から、学業成績に対する女子学生の認識の特徴を探索的に明らかにし、さらには「授業時間外週間学習時間」の特徴と関連付けて考察することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象

福岡県内の女子大学生326名を対象に無記名形式を用いて質問紙調査を行った（有効回答293名、有効回答率90%）。平均年齢19.17（SD=1.25）歳であった。

2. 調査時期

平成26年の7月～9月に大学の講義時間の最後を利用して、調査対象者には研究目的、匿名性であることなどを事前に口頭にて説明を行い、同意を得た学生に行った。また、調査に協力しないことで不利益を被ることはないことについても併せて説明を行った。

3. 調査内容と分析方法

調査内容は、①「授業時間外週間学習時間」などに関する質問が含まれたフェイスシート②「学習成績についてのあなたの考えを3つ以上の短文で自由に書いてみてください。」と自由に記述を求める形式で実施された。

得られたデータは、KJ法（川喜田、1986）に基づいて分析を行った。本研究でKJ法を採用したのは、現場の様々な考えや情報をボトムアップ式で全体像を構築していく方法であり、図解化によるプロセス把握が可能であることから本研究に適していると判断したからである。

分析の手順は次の通りである。①ラベルづくり：一つの質問に対する複数の記述回答につき、同じ記述、或いは、類似していると判断される記述を一つのまとまりとし、一つのラベルとした。また、反対に1つの回答に2つ以上の異なる内容を記述したものは2つのラベルに分け処理をした。各ラベルにID番号と順番番号を決める。そして、何度とそのままに属する各原因を見直し、確認をした上、最終的に889枚のラベルが整理できた。②カテゴリー探索（グループ編成）：すべてのラベルを縦横に並べ、全部を繰り返し読んで、内容が類似していると思われるラベル同士を順次セットにして、「ラベル集め」作業を繰り返す。それ以上セットできない時点で、セットできた各ラベルに類似する内容を要約し、「カテゴリー」とした。そして、次々とグループ編成をして、カテゴリーを見出していく。③カテゴリーの検討・修正（複数評定者による分類）：分類の信頼性を確認するために、心理学を専門とする教員1名（第2著者）と臨床心理士資格を持っている2名の方と分類過程とラベルについて検討してもらった。第1著者の分類と一致しなかったカテゴリーについて、再度検討し、修正を行い、カテゴリーの再統合を行った。④カテゴリーの決定：以上の手続きにより、889枚のラベルは最終的に14の中カテゴリーに分類した。カテゴリーの再統合の結果は一致率が94%であったため、分類は信頼性があるものと判断した。その他、どのラベルともセットにならなかったラベルのうち、内容の把握に推測を必要とするものについて最終的に「分類困難」とした。

III. 結果

1. 「学業成績」のカテゴリー化

上記の分析を行い、女子大学生の「学業成績」に対する認識について、表1のような内容が得られた。中カテゴリーの全体の割合をみると、「努力と関係するもの」(36%)、「学びの量質を表すもの」(15%)、「成績がすべてではないとするもの」(14%)、「結果を示すもの」(6%)、「自己理解を深める手段」(5%)などの順であった。

表1 学業成績に対する女子大学生の認識に関するカテゴリー

中カテゴリー	回答数	回答%	小カテゴリー	回答例
努力と関係するもの	318	36%	努力すれば伸びるもの 努力次第 努力してもどうにもならないもの やる気次第	・努力したら必ず後から伸びる/努力したら結果がついてくる ・努力の証/頑張る次第である ・努力してもダメなときはだめ/頑張っても上がらない ・やる気次第で変えられる/やる気上がる
学びの量質を表すもの	134	15%	勉強量質次第 勉強の効率性 勉強の計画性 取り組み姿勢 授業内容への理解	・学習量に左右される/時間より質で決まる ・勉強のやり方次第/効率性も大事 ・計画的にするしかない/毎日の復習が大事 ・授業にどれだけ真剣に取り組むかだ/真剣さがバロメーター ・学んだ知識を理化できるかだ/授業内容をよく理解すればよくなる
成績がすべてではないとするもの	126	14%	重要である 大切だが全てではない 特に気にしない より人間の重視	・学生にとって重要だ/大切だ ・結果がすべてではない/体調も大事 ・あまり気にしていない/社会では外見だから気にしない ・人柄も大事/人間性を培うべき
結果を示すもの	53	6%	やった分の結果 後からついてくるもの 実力の勝負	・やった分だけである/結果がすべてだ ・頑張ればあとからついてくる/いまも昔も後からついてくる ・実力の勝負にほかない/実力の差がでる
自己理解を深める手段	46	5%	自分を映す鏡 自分の学力到達度を知る 点数より過程が重要	・これまでの自分を映すもの/私のラベル ・学習の到達度が分かる/自分の力が測れる ・点数より勉強の過程だ/努力より過程が大事
将来と密接な関係があるもの	36	4%	人生を決めるもの 次に生かす材料 将来のためになるもの	・人生を決める尺度/今後の人生を決める ・自分が成長するための材料/便宜上必要なもの ・将来への第一歩/就職するときに必要
成績の変動性	34	4%	伸びるもの 変化するもの 伸びないもの	・落ちてもまた伸びるもの/苦手より得意を伸ばすべきだ ・変えることができる/変動しやすいもの ・伸び悩み/簡単には伸びない
評価に繋がるもの	34	4%	人を評価するもの 人と比べるものではない 数値で評価するものではない	・人を判断する材料/その人の社会的地位 ・人と比べてはいけない/競うものではない ・数値ですべてが決まってはダメ/テストで判断するものではない
能力を表すもの	22	2%	能力次第 実力	・能力次第である/自分の能力の表れ ・人の実力だと思う/個人の実力だ
成績評価に対するネガティブ感	19	2%	ネガティブなイメージ よくないと不安	・不平等である/恐怖の産物だ ・よくないと不安だ/悪いと焦る
自分自身の各側面により表すもの	19	2%	遺伝/生まれつき 個人差がある 興味の有無 得意・不得意の影響	・生まれ持った頭の良さが左右する/遺伝子で決まる ・人それぞれだ/それぞれ個人差がある ・興味が無いと上がらない/興味次第である ・科目によって得意不得意がある/向き・不向きがある
教員との関係性	12	1%	先生の授業による 先生との相性	・先生の授業次第だ/先生によって出し方が違う ・教科担当教員との相性/先生との相性もある
運	11	1%	運	・運も関係する/結局のところ運だ
評価基準によるもの	11	1%	出席率 レポートなどの提出	・出席率が基本/出席すればどうにかなる ・テストレポートでの努力次第/レポート提出次第
分類不能	14	2%		・親を喜ばす手段/友達と高め合う/リズムが大事

2. 「授業時間外週間学習時間」の集計結果

「授業時間外週間学習時間」を「全くしない」から「21時間以上」と10段階で尋ねたところ、全体の女子大学生では、「全くしない」が28.33%、「1時間以内」が27.30%、「1時間～2時間以内」が25.60%で、1時間未満から2時間以内と回答した学生が52.90%と半数を占めていた。5時間以上の学びに取り組む学生も10.57%を占めていることが明らかになった(図1)。さらに、学外実習事情などがあり調査対象外となった5名の4年生を除いた1年生から3年生の学年別の授業時間外週間の学びの回答状況をパーセンテージで分類集計した結果を図2に示した。3年生になって5時間～20時間を使って学ぶ学生が増加していることがみられた。

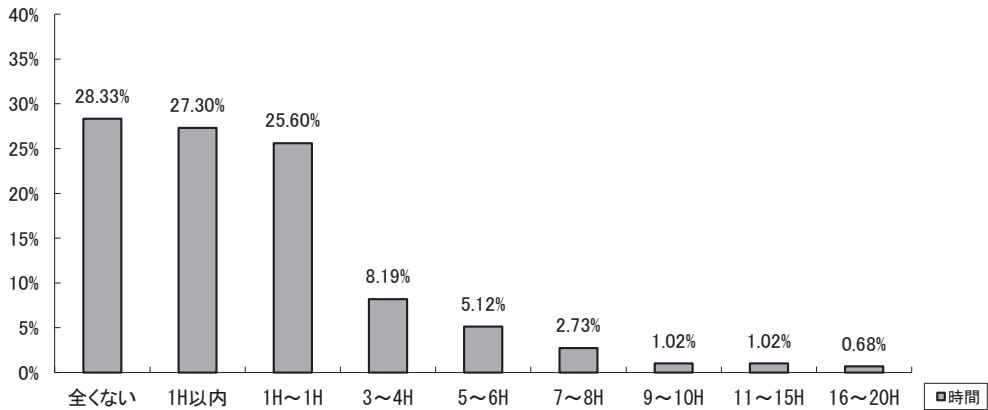


図1 授業外週間学習時間の集計結果

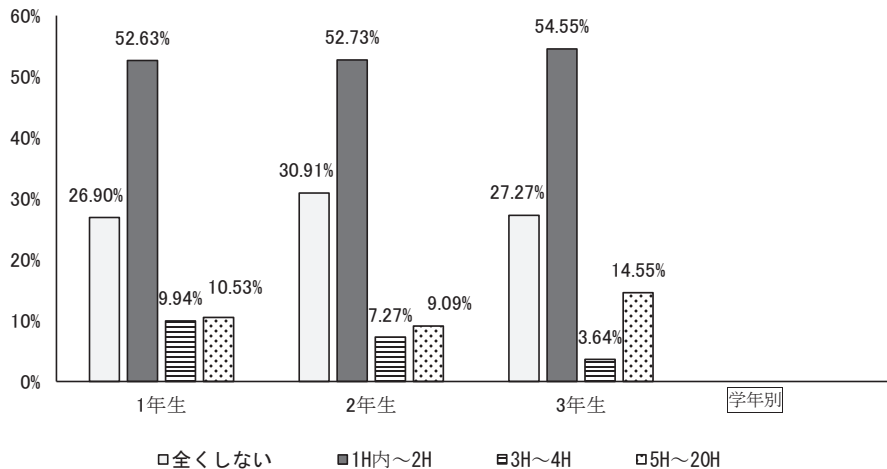


図2 学年別授業外週間学習時間の割合

IV. 考察

本研究では889枚のラベルが得られ、KJ法により14の中カテゴリと41の小カテゴリが抽出分類された。これらのカテゴリと授業外時間での学びの集計結果からは、女子大学生の学業成績についての認識には大きく4つの特徴【内的・変動的とする認識】【外的・変動的とする認識】【内的・安定的とする認識】【外的・安定的とする認識】があることが示唆される(表2)。以下、それぞれの特徴について考察を述べる。

(1) 【内的・変動的とする認識】について

多くの女子大学生にとって、成績は努力したら必ず後から伸びてくると考え、努力の証であり、やる気があれば成績は上がっていくなど努力と関係するものと認識していることがみられた。また、時間を使って勉強すればよくなる、効率よく勉強すべきで、毎日復習をすることを通して学習内容への理解が大事であるというような学びの量質によって成績は変わっていく意味合いが示唆された。そして、やった分の結果を示すものであることから、成績が悪いと不安になるという成績評価に対するネガティブ感を持ちつつ、成績はすべてではないと考えていることが窺えた。つまり、学業成績は簡単には伸びないが、自分の努力によって変えることができるという「変動性」が示唆された。さらに、成績によって自分の学習の到達度が分かること、自分を映す鏡として自己理解を深める手段としての要素があることが示唆された。これらは女子大学生の内的作業のものであり、成績は変えられるものであると意識していることから【内的・変動的とする認識】と言ってよいだろう。これを週間授業外時間数と照らし合わせて考察してみよう。1学年から3学年まで、「全く勉強しない」から2時間内における女子大学生の学び時間の比率が高く、学年での差異があまりみられなかった。一方、独立行政法人日本学生支援機構が2014年に発表した「平成24年度学生生活調査」によると74%が学外でアルバイトに従事している。大学進学までの猛勉強の努力によって進学ができた安心感や学び過程の経験から学業成績は変動可能であることを客観的に認識していることが推測される。それは、3学年生になると次の進路就職との関連性から5時間以上の学びを行っている学生が大幅に増えていることから考えられる。

(2) 【外的・変動的とする認識】について

女子大学生の学業成績についての見方として、成績はその時の運が関係しており、努力をしても結局のところ運勢が大事であると考えていることが示唆された。古来から試験前に神社への合格祈願を行う行為、お守りを購入し風水をよくするなどのような信念は、現在は一つの気持ちや楽しみに変化しているが、成績は「運」であると認識している極一部の学生には自分がコントロールできない無力的な部分が見られ、外的要因により変動的であるという認識を持っていることが窺える。また、成績は人を判断する材料であり、他者からの評価として他者と比べられる要素が強いことから評価につながるという認識があるが、成長するために必要な材料で、自分の将来のためになるものとして大事であると考えていることが

窺えた。

表2 学業成績に対する4つの認識

4つの認識	中カテゴリ	小カテゴリ
内的・変動的とする認識 (82%)	努力と関係するもの(36%)	努力すれば伸びるもの 努力次第 努力してもどうにもならないもの やる気次第
	結果を示すもの(6%)	やった分の結果 後からついてくるもの 実力の勝負
	学びの量質を表すもの(15%)	勉強量質次第 勉強の効率性 勉強の計画性 取り組み姿勢 授業内容への理解
	成績がすべてではない(14%)	重要である 大切だが全てではない 特に気にしない より人間性の重視
	自己理解を深める手段(5%)	自分を映す鏡 自分の学力到達度を知る 点数より過程が重要
	成績の変動性(4%)	伸びるもの 変化するもの 伸びないもの
	成績評価に対するネガティブ感(2%)	ネガティブなイメージ よくないと不安
外的・変動的とする認識 (10%)	評価に繋がるもの(4%)	人を評価するもの 人と比べるものではない 数値で評価するものではない
	将来と密接な関係があるもの(4%)	人生を決めるもの 次に生かす材料 将来のためになるもの
	教員との関係性(1%)	先生の授業による 先生との相性
	運によるもの(1%)	運である
内的・安定的とする認識 (5%)	自分自身の各側面により表すもの(2%)	遺伝/生まれつき 個人差がある 興味の有無 得意・不得意の影響
	能力を表すもの(2%)	能力次第 実力
外的・安定的とする認識 (1%)	評価基準によるもの(1%)	出席率 レポートなどの提出
分類不能 (2%)	分類不能(2%)	—

しかし、わずかであるが、成績は教員の試験の出し方が異なるため、授業次第であることや相性もあると考えているなど外的な要因の強弱により成績は変わっていくというように認識していることが推測される。上述考察(1)で示したように、大学進学後からは学内より学外で活動している時間が多く、「軽労働」形式のアルバイトにより社会環境に慣れ社会人として大人の世界に足を踏み入れた際のトレーニングとして捉えることが可能である。しかし、アルバイトを辞める理由として最も多いのが「上司・同僚との人間関係の不和」が多いことから学内における「授業外時間」での学び方、効果的な過ごし方、キャリア教育との連携教育の工夫が必要であることが考えられる。

(3)【内的・安定的とする認識】について

この部分の認識の特徴をもっている大学生は少人数で占める割合は非常に少ないが、成績は生まれつきの頭の良さに左右され、個人差があり、興味ありなしの教科次第で成績が決まり、得意不得意・向き不向きによる影響がすべてであると認識していることが考えられる。これらの要素は成績に影響を及ぼす側面として変わりにくく、人の固有の素質や遺伝的要素が含まれている内容である。榊・村山(2007)は、人は本来、成功失敗を自動的に能力帰属しやすい傾向を持っており、能力以外の帰属因を考慮するのは難しい側面を持っていると示しているが、今回の調査研究からも少なからずこのような心理的特性が働いていることが考えられた。こうした能力帰属の学生への介入が今後の教育支援を行う際の課題が提示されたと言えるだろう。

(4)【外的・安定的とする認識】について

また、極わずかの女子大学生には、成績は評価基準によるもので、出席率の決まりやレポートの提出などの設定された基準は自分の努力によって変えることができないものと認知していることが窺えた。このような外的要因は固定されて自らの力で統制不可能であると考えられていることが示された。Weinerら(1971)によると、同じ成功・失敗に直面しても、それを安定的な要因に帰属するか、不安定的な要因に帰属するかで、将来の類似課題における成功への期待は大きく異なっていくとされている。学業成績のような一つの結果を課題の困難度のような外的で変動しにくい要因に帰属すると、次回においても事情は変わらず、同じような結果になりやすいことが考えられる。従って、このような認識を持つ大学生への学修サポートについて今後の検討が必要であろう。

最後に本研究の今後の課題について述べる。①今回は一部の地域の文系女子大学生のみを対象に研究を行った。また、分類不能の部分について詳細な検討ができていない。今後はこれらの課題を踏まえて、男子大学生に関する検討も含め、さらに広い地域での対象者を考慮する上、日本の大学生の学業成績に関する認識の調査を行い、尺度作成を行う必要があると思われる。②今回は女子大学生の授業外週間学習時間について実態を調査し、現状を分析したが、今後は大学生のキャリア教育支援の観点から、学修サポートの方策及び教授法を模索していく必要がある。

謝辞：本調査研究時にご協力賜った大学の先生方、学生の方々に厚くお礼を申し上げます。

【引用・参考文献】

- 江原武一・杉沢茂二(1980). 中等教育学力の比較研究(1) — 学習成績評価の構造的変容を中心 — 奈良教育大学教育研究所紀要, 16, 73-81.
- 林 正雄(1990). 体育の学業成績に対する原因帰属の因子構造 — 小学生について — 日本

- 体育学会大会号, (41B), 802.
- 川喜田二郎 (1986). KJ 法—混沌をして語らしめる 中央公論社.
- 北條雅一 (2010). 大学在学中の学習成績・学習への取組と卒業後の所得 新潟大学経済論集, 89, 111-120.
- 前田洋一 (1996). 学業成績に対する中学生の認知 教育心理学研究, 44 (3), 311-321.
- 松田浩平・佐藤恵美・地頭沙織・田中翔子・田原理恵・森昇子 (2006). 学習への動機づけと試験成績の原因帰属が学習成績に及ぼす影響—学習能力と性格の関連性から— 文京学院大学人間学部研究紀要, 8 (1), 177-188.
- 中村 真・松田英子 (2015). 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 (2) 江戸川大学紀要, 25, 135-144.
- 中塚善次郎 (1970). 高校学業成績の規定要因に関する研究 教育心理学研究, 18 (1), 1-13.
- 大西三佳子・志村昭暢 (2013). 高等学校における英語学習者の外発的動機づけの調整スタイル・自己効力感・メタ認知方略と学習成績の自己評価との関連 Research bulletin of English teaching, 10, 75-93.
- 榊 美知子・村山 航 (2007). 達成場面における原因帰属の認知過程の検討—自動性-統制性の観点から 日本認知心理学会発表論文集, 131.
- 塩見邦雄・渡邊伸子 (1999). 学業成績の規定要因についての研究 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 520.
- 豊田弘司 (2010). 学業成績の規定要因間の関連性と学習活動 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 19, 7-10.
- Weiner, B., Frieze, I.H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R.M., (1971). Perceiving the causes of success and failure. In E.E. Jones., D. Kanouse., H.H. Kelley., R.E. Nisbett., S. Valins. & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown New Jersey: General Learning Press.

‘Academic Achievement’ – an exploratory study of female college students’ awareness

Enka TOMONO, Kazuko KOJYO

Faculty of Humanities Department of Education and psychology

Kyushu Women’s University

1-1 Jiyugaoka Yahatanishi-ku Kitakyushu-shi 807-8586 Japan

Abstract

Many research studies have identified the importance of academic achievement for admissions and career selection in junior and senior high schools. However, there are few studies at college level, and none have directly investigated how college students regard their own academic achievement records. Recently, the number of students enrolling at female colleges has been increasing. The rising expectations as to the role they will play in society motivated this study. The results of the analysis were organized according to the KJ method; 14 categories and 41 sub-categories were identified. It was observed that many female college students viewed academic achievement as ‘intrinsic’, ‘fluctuating’, and dependent on factors such as ‘effort’, and ‘quality and quantity of learning’. Furthermore, the finding that more than half of all students spend only 1 to 2 hours on ‘outside of class weekly study time’ shows the need for improved cooperation between career counselors and educators.

Key words : academic achievement, female college student awareness, KJ method